

テニスにおけるコーチ学の経緯と展望

植田 実¹⁾

Circumstances and a Future Foresight of Coach Study in Tennis

Minoru UEDA

Abstract

In reality, the fact that there might be no literature related to the circumstance of “coaching study” is common with “coaching Tennis study”. Therefore there is not many information related to the circumstance of “coaching tennis study” in order to discuss it. Even though that, in this paper, the circumstance of “coaching tennis study” was discussed from the view of eight issues as follows;

1. Discussion on coaching study in terms of the spread of a game using a tennis ball.
2. The circumstance of “coaching tennis study” in Japan.
3. The captain system that was created when the Davis Cup was initiated.
4. Systematization of coaching tennis by Mr. Harry Hopman.
5. Coaching tennis in Europe.
6. Coaching resulting from turning into professional sports.
7. Coaching tennis as an extension of child-parent relation.
8. A future foresight.

From the view of the above eight issues, coaching style was discussed and some thought on the circumstance of coaching tennis were given to each issues. Finally what coaching ought to be, which Japan tennis should aim at for the future was discussed.

Key words : Tennis, Coaching Style, Perspective.

1) 競技スポーツ学科

テーマ：コーチ学の経緯と展望 ＜個人種目の観点に立脚したコーチ学の経緯と展望＞

テニスにおけるコーチ学の経緯

個人種目、ここでは筆者が長年携わっている個人種目・テニスのコーチ学についての経緯と展望を検証していきたいと思う。

まず最初に、テニスが現在の形となるまでの変遷を踏まえてコーチ学の経緯を考えてみることにする。11世紀フランスの修道院でテニスの原型であるジュ・ド・ポームが考え出され、ローンテニスへ変わり現在に至る。テニスの歴史は古いにも関わらず、正確な文献として残っているものは極めて少なかった中、ハイナー・ギルマイスターの著書「Kulturgeschichte des Tennis」(1990)が発表され、その訳本「テニスの文化史」(稲垣正浩他訳)をもとにテニス競技に関する裏づけ理論が解明されてきた。その歴史の中でコーチ学の経緯を知ることができるが、ここでは日本への伝来、そしてテニスのコーチ学に大きな影響を与えてきた人物、事柄について考察していく。

1：テニス球戯の普及に見るコーチ学

中世のテニス球戯は王侯貴族の居城、そして修道院で行われており、13世紀頃の散文小説の写本に見られるテニス球戯の絵には、技術指導している様子らしきものが描かれている。(ハイナー・ギルマイスター「テニスの文化史」1990稲垣正浩他訳) その様子から当時の技術指導は「コーチング」や「コーチ学」とは程遠い、いわゆるテニス球戯の遊び方についての伝授といえるものであった。しかしながら、14世紀に入り、教育書の中で王子教育の方法としてテニス球戯の話にふれている(ハイナー・ギルマイスター「テニスの文化史」1990)。これらは「コーチ学」としての芽生えがあった時期であると推測できる。

その後、王侯貴族が子弟教育を修道院に委ねるようになり、修道士がテニスの指導的役

割を果たすようになった。テニス球戯が、なぜ王侯貴族の中で盛んになったかという理由は、テニス球戯が程良い運動量であり、長時間にわたることがないので若者に向くと考えられていたと、されている。中世はテニス球戯自体の紹介、その遊び方についての伝授がコーチ学の主だったものであったといえる。

こうしてヨーロッパ全土に広がったテニスは、ドイツでは「カーツ球戯の意義に関する重要な本」ヤン・ファン・ベルゲ著(ハイナー・ギルマイスター「テニスの文化史」1990)という記録書へとつながり、遊ぶだけの球戯から「考察するコーチ学」の段階へと入っていった。

現在、世界中で「テニス」といわれる前の呼び方である「ローンテニス」になった基礎は1874年イギリス人のウィングフィールド少佐により、テニスにゲーム性を持たせるべくルール化されたものであったが、当時もまだまだ競技方法の説明が主であった、この頃からは用具の使い方、打球方法などの技術コーチングが始まったと考えられる。

2：日本におけるテニスコーチ学の経緯

日本においては、1878年(明治11年)体操伝習所の教師G.Aリーランド氏の指導によりテニスが普及し始めた。当時の指導もまたテニスというスポーツの紹介であった。

1884年(明治17年)東京高等師範に坪井玄道氏が赴任となり、1888年(明治21年)学生達へ積極的にテニスを教え「校技」といわれるまでに盛んになった。(安藤基平1914年)ということから、この頃には、いかにテニスをするかという技術的なコーチングがあったと思われる。また、そのコーチングが継続的に行われていたということからクラブとして活動していたことも推測できる。

しかしながら、ここで言うテニスとは、現在ウインブルドンをはじめとするグランドスラム大会で行われている「テニス(ローンテニス)」ではなく、軟らかいゴムボールを使

って行う軟式テニス（1992年よりソフトテニスへ）のことである。これらのことを考えると、日本テニスのコーチ学の経緯というのは、日本独自のソフトテニスが始まった大学テニスの源流に通ずるものであり、教育的背景を基盤とする集団から発生してきた「コーチ学」であり、ソフトテニスのダブルスからの成り立ちといえる。

大学テニスの発展は、教師、先輩、後輩という形の上で教えを請うコーチングで始まり、後にその学生が教師として全国へ赴任し、学校体育の中でテニスを指導しくことに繋がった。日本テニス界の海外への先駆者でもある太田芳郎氏は著書「世界テニス行脚ロマンの旅」の中で、「小学校三年生の時（1909年）、担任の先生にテニスというおもしろい遊びを教えてもらった。テニスのおもしろさに取りつかれました。」と述べていることから、もうすでに学校の教師による技術コーチングが始まっていたことがわかる。

1913年（大正2年）慶應義塾大学が軟式テニスから硬式テニス採用へと踏み切り、当時はほとんどが軟式テニス出身の選手であったが、その技術が世界に通用することを1920年アントワープオリンピック銀メダル獲得で証明した。このメダルは日本がはじめてオリンピックで獲得したメダルである。テニス技術はいつの間にかヨーロッパやアメリカの形を真似るようになった。もし、硬式テニスへの変更後も軟式テニスのグリップが受け継がれていたら、歴史は変わっていたかもしれない。現在では世界中の選手達が軟式テニスのグリップに近いウエスタングリップでフォアハンドを強打し、プレーしている。誰が予想したであろうか。

また精神面において、日本テニスの「コーチ学」も他の種目同様に「武道」による影響を受けたことは間違いない。そのスポーツを志す姿勢、勝負に対する哲学は日本古来の伝統である「武道」による考え方が基礎になっていた。

1920年ウインブルドン大会で日本の清水善造氏が世界NO1チルデンとの対戦中、転倒したチルデンに対し、ゆっくりとしたボールを返したことは、戦前、戦後の教科書で取り上げられ美談として語り継がれている。また、1930年フレンチオープンで太田芳郎氏とフランス四銃士の一人ボロトラとの対戦で翌朝の新聞に「日本の武士道精神を太田の試合態度に見た」（太田芳郎1992「世界テニス行脚ロマンの旅」）という記事で、示されるように、日本選手の心の中に、勝負以前のスポーツマンシップを重んじる精神が強かったことがうかがえる。

3：デビスカップ（国別対抗戦）の創設におけるキャプテン制度

1900年デビスカップ（国別対抗戦）が始まり、各国チーム編成において、選手とキャプテンの構成が義務付けられた。個人種目であるテニスで、唯一試合中のコーチングが許される場面がこの国別対抗戦である。始まった当初は、キャプテンとはいえ選手兼任のチームがほとんどであり、日本は1921年に初参加したが、選手の一人である熊谷一弥氏が兼任であった。1951年より熊谷氏が再度キャプテンとなり、このときから専任としてのコーチ（キャプテン）がスタートした。それまではコーチングといえば、選手として助け合う程度であったことから、明確な役割として位置づけられた。

デビスカップは、個人種目であったテニスをデビスカップチームという形のコーチング現場集団を作り上げた。自分自身が選手でありコーチでなくてはならない時代の中で、先輩達の経験やアドバイスは大きな力となった。1920年代世界を転戦した太田芳郎氏は次のような言葉を著書に記している。『外国の真似をしていたら勝てない、日本人独特の技を持って闘わなくては強くはなれない』と、清水さん、熊谷さんの信念を教え込まれた」（太田芳郎氏1982年）。当時は先輩から後輩へ

の経験的アドバイスがコーチングの形態であり、最も信頼できる情報であり、日本のみならず世界的にもこの形態でコーチ学というものが存在していたことを知ることが出来る。

1920年～1930年代は日本独自で日本人に合った発想として作り上げたテニス（ソフトテニス）のコーチングが世界を驚かせることとなった。

デビスカップチームは現在でもオフィシャルのキャプテンと選手4名で構成されているが、デビスカップそのものに賞金が付き、その国のテニス協会財源確保として欠かせないものとなってからは、監督（オーガナイズ）、コーチ（テクニカル・タクティカル・メンタル）、トレーナー（フィジカル・メンタル）など、コーチングにおける役割分担がされるようになり、より高い専門性が必要とされるコーチングになってきた。

4：ハリー・ホップマン氏によるコーチングの体系化

現代テニスのコーチングで最も重要な役割を果たしたのが、オーストラリアのハリー・ホップマン氏（1906～1985）である。オーストラリア・デビスカップチームのキャプテン（1950～1969）として母国を15回の優勝に導いた。それまで自己流であったテニス界のトレーニング方法を、「コーチと選手」という立場でコーチ学を確立した。現在でも練習の基本となっているシングルス2対1練習方法は、コート上で選手の出来る極限まで負荷をかけ続ける。また、フィジカルトレーニングを取り入れ、テニスのみならず、アスリートとしての基礎トレーニングを提唱していったのもこの時代である。

その後、ホップマン氏はアメリカ・フロリダ州にテニスクャンプを設立し、世界各国からの選手を受け入れるアカデミーを作った。このコーチングシステムで世界中の選手達がオーストラリアテニスの恩恵を受けることになり、コーチングの体系化がスタートしたと

いえる。それはまたアメリカのみならず世界各国からのタレント発掘へと広がっていった。

ホップマン氏のオーストラリアでのコーチングは、当時の選手、そして若い指導者へ受け継がれ、50年経った現在でもテニスコーチングの基本となっている。

晩年となった1985年、筆者自身がキャンプを訪れホップマン氏の部屋でコーチングについて簡単な質問したことがある。「コーチにとって一番大事なものは何ですか？」という漠然とした質問に対し、しっかりとした口調で「大切なことは、千も二千もある。あるときには学校の先生であり、あるときには友達、またあるときには親にもならなくてはならない。」と答えていただいた。テニスコーチにとどまらない教育者としての威厳を強く感じた。

現在では世界各国どこへ行ってもあるテニスアカデミーのパイオニアであり、テニスのコーチングを巨大ビジネスへと導いた人でもある。

5：ヨーロッパにおけるコーチング

テニスのコーチングはそれまで経験的かつ踏襲的なものであり、技術における生理学的原則が議論されていなかった。1989年の国際テニス連盟コーチワークショップで、ドイツのショーンボーン氏がテニス技術をひとつの運動連鎖としてとらえ、バイオメカニクスの見地から能力開発に向けてのコーディネーショントレーニングを発表した。テニス技術開発のシステム化であり、潜在的運動能力を競技能力へ変換することである。この影響はヨーロッパを始め世界的に広がりを見せ、コーチングの新しい分野に入っていくきっかけを作った。ドイツのトリム運動、フランスのミニテニス、オーストラリアのオージー（OZ）スポーツなどは、競技スポーツの基礎をなす運動能力の開発を目指すものであり、これらは現在のテニスコーチングの大きな刺

激となった。練習といえばテニスコートでボールを打つことしか考えられなかった時代からコンプレックス・コーディネーショントレーニングなどのトータル性を重視したトレーニングを用いるようになった。旧チェコスロバキアにおいては国を挙げての科学トレーニングがテニス選手を一人のアスリートとしての肉体に作り上げ、世界的に一時代を築いた。現在ではグランドスラムの会場でもほとんどの選手が行うようになってきた。

ヨーロッパの各国がひとつの巨大な国として機能し始め、テニスコーチングについて、国としてリーダーシップをとっているのはテニス発祥の国フランスである。システム化されたコーチングは世界的にも注目され、多くの国々が手本とするものである。また、その隣国であるスペインはその対極にあるといていいであろう。地域性の強い国柄であり、国としてのまとまりには欠けるが、それぞれの“個”の強さが際立っている。これはスペインそして南米諸国の選手に共通することである。フランス、アメリカなどの華やかさ、ドイツのアカデミックさはなく、ただひたすら競争の中から生まれるスピリット、身体感覚を自動化する練習量がコーチングの特色である。ともすれば原始的とも思える方法が世界のトップを作っている現実がここにある。

6：プロ化に伴うコーチング

1960年代にプロ化されたテニス界は、試合の結果報酬が賞金となり戻ってくるようになった。選手達は自己の競技力を上げるために優秀なコーチを求めた。とりわけハリー・ホップマン氏のもとには多くの選手が訪れ、キャンプでのトレーニングそして遠征に同行しコーチングが継続できるシステム、「ツアーコーチ」が始まった。「ツアーコーチ」は、その選手一人だけを指導するプライベートコーチと二人以上を指導するチームコーチに分かれる。選手達は今まで試合に対する反省、評価、課題、実行を一人で行っていたが、パ

ートナーを得ることで客観的にゲーム分析、自己分析が出来るようになった。特にメンタル面でのサポートは大きく、長期遠征についてのモチベーション維持という面から選手達を支えてきた。日本テニスのスーパーバイザーであるボブ・ブレット氏は1979年からチームコーチとしてツアーに参加し、その中にある競争環境で選手達のモチベーションを高めていった。

コーチ学を語る場として、プロツアー(ATP)を中心とする現場主義のコーチングと国際テニス連盟(ITF)を中心とする学術コーチングに分かれた感もあったが、最近では互いの経験・知識・医科学的分析を共有できる場としてのコーチ会議が毎年開催され、世界各国のコーチ達に大きなサポートとなっている。プロ化はコーチングの裾野を広げ、その質を高めたといえる。また、今まで選手経験があるものにしか出来なかったコーチングが、知識や科学的裏づけをもとにコーチングする形態もでき、選手達のコーチングの認識も変わってきた。それは選手達のより高いパフォーマンスへとつながったといえる。

しかしながら、プロ化されたテニスのコーチングは一方において問題も抱えている。

テニス選手としての成功を目指す「英才教育」は、ジュニア選手の発育・発達を超えたところで行われる場合も多く、体格や技術の陰に隠れた「精神の発育・発達」に関しての問題を引き起こしている。1992年14才でバルセロナオリンピックの金メダリストとなったジェニファー・カプリアティー(アメリカ)が、その翌年、万引きとマリファナ所持で補導された例や、2005年15才でフレンチオープンQFに進出したセシル・カラタンチュバ(ブルガリア)によるドーピング問題はプロ化がもたらした負の産物であり「勝利至上主義」の一面であると考えられる。本当の意味でのプロフェッショナルコーチングとは競技者の発育・発達段階やレベルに応じて真のコーチングを行えるもの(勝田2005)であり、選手

達により充実した競技生活を与えるものでなくてはならない。コーチ学そのものが競技力のみならず、人間性の育成に焦点をあてなくてはならない事実がここにある。

また、選手とコーチの間に発生する金銭的雇用関係は時として、大変短い、継続性を持たない関係で終わることも多い。コーチングの本質から離れ、互いに我慢を忘れ、自分のやりたいことを行い、挙句の果てには解雇してしまう。選手もコーチも互いに真のプロフェッショナルとしての仕事を全うしなくてはならない。

7：親子関係の延長としてのコーチング

子供達がテニスに出会うきっかけは親の影響がほとんどであり、初めてのコーチングは親からうける場合が多い。テニスに限らずスポーツの若年化が進むなか、親子関係がそのままコーチと選手の関係となってくるケースが増えてきた。境界線が全く見えてこない。本来、親は親の役割があり、コーチは選手育成のエキスパートとして役割分担をするものである。しかし、現在コーチの仕事は選手との信頼関係を築く他に、親とのコミュニケーションが重要なポイントとなる。以前は、選手とコーチが両輪となって競技生活を送ってきたスタイルに加え、そこに親を含むチームワークができ、選手の更なる能力を発揮させている。今日、情報や通信の発達により、コーチングのノウハウを知ることができる時代になったことは大きな助けである。

2004年ウインブルドンで優勝したシャラポワ（ロシア）は、アメリカでトレーニングを積むが、父親がコーチであり、アカデミーはヒッティングパートナーと環境を提供している。男子の選手には余り見られない、若い女子選手に多く見受けられる関係である。親が我が子である選手を守るしかないという理由である。コーチングが信頼関係の上に成り立つことはもちろんであるが、このような親子関係の延長でツアーをまわる選手は多い。

若い選手が自立できず、コーチ・親に依存する傾向が極めて強い現状がここにある。試合中、常にコーチや親の方を向いてプレーする姿は、コーチと選手の一体感、そして強い絆をあらわすが、ある意味では依存心の強さの表れともとれる。それは勝利の瞬間にコーチ、家族にその喜びを表現するものとは異なる感がする。

自立した選手の個性的プレーは感動であり、変化に富んで面白い。その選手の生き方を創造できる楽しみがある。女子テニスの世界的傾向として、パワーテニスに頼る単調な試合運びがあげられる。より観客を楽しませ、究極の「テニス芸術」を作り上げていくことがコーチの仕事であり、使命でもある。

8：今後の展望

これまでコーチングの形態として探ってきたが、依然として日本には選手主体でないコーチングが存在することも事実である。仙台大学の勝田隆氏は「権威主義・経験主義・精神主義・勝利至上主義・強制命令型・意図のない強豪模倣・意味のない伝統踏襲・そして体罰やしごき、セクシャルハラスメントなど、日本の旧態依然とした指導方法から生み出された負の遺産を表現したものである」そして選手自身が「自らの中に優秀な“コーチ”を持つこと」とコーチングの方向性を述べている。

日本テニス協会ナショナルチームゼネラルマネージャーの小浦武志氏は選手の成長過程を5つに分け、自転車（Information Term）⇒モーターバイク（Pressure Term1）⇒スポーツカー（Pressure Term2）⇒F3000（Tune Up Term）⇒F1（Climax Stage）としている。また、指導者タイプも4つに分け、指導者主導型1、指導者主導型2、パートナー型（2シーターの助手席でプレッシャーを減らす）、情報提供と支持のみ（車から降りプレッシャーをかける）とし、それぞれの段階で具体的なコーチングの関わり方を示して

いる。

プロツアーのスケジュール過密がもたらす選手への負担、そして低年齢化は選手の肉体と精神のバランスを不均衡にしてしまう危険性など、テニス界の抱えるコーチングの課題は多い。現場においては、経験的コーチングが科学的コーチングを越える場面も多く、そのコーチの持つ“感性”や“匂い”の主観的コーチングの裏づけを積み重ねることと、研究による客観的コーチングの二方向性がこれらの問題を解決に導くものである。

またそれは、選手自身が「自立」し、「自分を知る」ことで、より健全な選手生活を送るためのものでもあり、“現場の目”と“科学の目”の融合こそがその先にある真のコーチングにたどり着くものであると確信している。

複雑化した情報社会において、コーチ学そのものも例外ではない。氾濫する情報・知識を整理し、多様化する世界の中における日本独自のコーチ学を見つけ、よりシンプルに突き進むことこそこれからの日本スポーツの生き残る道であろう。各年齢における段階的・明確なコーチングの確立が急務である。

引用・参考文献

- ・ハイナー・ギルマイスター著・稲垣正浩他訳
1990「テニスの文化史」大修館書店 pp.23-27,
pp.36-37, pp.175-179
- ・安藤基平 1914「東京高等師範学校庭球沿革
史」
- ・後藤光将・福本全2001「弥高」
- ・表孟宏編著 1997「テニスの源流を求めて」
大修館書店 p.453
- ・太田芳郎 1992「世界テニス行脚ロマンの旅」
個人での出版 pp.32-35, pp.60-66
- ・勝田隆 2005「真のコーチングはアスリート
をどう育てるか」現代スポーツ評論 創文企
画 pp.42-52
- ・小浦武志 1999「一流になる」総合法令出版
pp.28-34
- ・リチャード・ショーンボーン 1999「Advan-
ced Techniques for Competitive Tennis」飯
田藍監修 佐藤雅幸訳 ベースボールマガジ
ン社 pp.62-65